

経済学に関するブリーフィング文書

対象ソース:

「経済学 - Wikipedia」からの抜粋

「経済学史の旅」からの抜粋（タイムライン、キャストリスト）

目的:

提供されたソースから、経済学の主要なテーマ、最も重要なアイデアや事実、そしてその歴史的発展と主要人物をレビューする。

概要:

経済学は、人間社会における物質的な財やサービスの生産、取引、およびその需要と供給の法則を研究する社会科学の一分野である。その定義は歴史的に多様であり、研究対象や方法論の進化とともに変化してきた。古代ギリシャの哲学的考察に始まり、重商主義、重農主義を経て、アダム・スミスによる古典派経済学が確立された。その後、マルクス経済学、新古典派経済学、ケインズ経済学などが登場し、それぞれが異なる視点から経済現象を分析し、論争を繰り広げてきた。現代では、ゲーム理論や行動経済学といった新しい分野が発展し、経済学の対象はより広範な人間行動や社会制度へと拡大している。

主要テーマと重要なアイデア/事実:

1. 経済学の定義の多様性:

- a. 経済学の定義は、時代や経済学者によって多様である。「経済学 - Wikipedia」では、「経済学者による定義は多様であり、経済学者による様々な見解を反映している」と指摘されている。
- b. 初期にはジェームズ・スチュアートが「全住民のために生活資料の一定のファンドを確保すること」と定義し、アダム・スミスは「国民に十分な収入や生活費を提供すること...公共サービスのための収入を国家にもたらすこと」と定義した。
- c. ジャン=バティスト・セイは「富の生産、分配、および消費の科学」と定義し、ジョン・スチュアート・ミルは「富の生産のための人間の共同作業から生じる社会現象について、それらの現象が他の目的の追求によって変更されない限り、その法則を追跡する科学」と定義した。
- d. アルフレッド・マーシャルは、その主著『経済学原理』で「生活上の通常の仕事(ビジネス)における人間の研究であり...幸福であること(ウェルビーイング)を達成するために用いられる物質的な必要条件に密接に関連する個人的および社会的行動の研究」と定義し、富の研究にとどまらず人間の研究の一部であるとした。これは、「political economy」から "economics" への名称変更と普及に大きく貢献した。
- e. ライオネル・ロビンズは、経済学を「他の用途を持つ希少性ある経済資源と目的について人間の行動を研究する科学」と定義し、希少性に着目した分析的な定義を提示した。

- f. しかし、この定義には価値判断や倫理の問題を無視しているという批判も存在し、ジョン・メイナード・ケインズやロナルド・コースが指摘したように、経済学は本質的に価値判断を伴うという見方もある。
 - g. 現代では、ジョセフ・E・スティグリッツがトレードオフ、インセンティブ、交換、情報、分配を重要な手がかりとし、ロジャー・マイヤーソンが社会的な制度における個人のインセンティブ分析として定義するなど、その対象範囲は拡大している。ハジュン・チャンは、経済学は方法論ではなく調査対象の観点から定義されるべきだと主張している。
2. 経済学の起源と歴史的発展:
- a. 経済学の起源は、古代ギリシャの哲学的考察に遡る。プラトンは理想国家論で厳格な経済統制を、アリストテレスは富の蓄積を目的とする交換（クレマティスティケ）を批判した。中世にはトマス・アクィナスが私有財産を肯定しつつ困窮者の権利を認めた。
 - b. 近世欧州の経済発展に伴い、経済学は学問として形成されていった。重商主義学説は海外貿易による国富の増大を目指し、その後に登場した重農主義学説は政府の介入によらない経済の自律的な動きを主張した。フランソワ・ケネーの『経済表』は国民経済の再生産システムを解明し、経済学体系化の端緒となった。
 - c. アダム・スミスの『国富論』（1776年）は、現在の理論化された経済学の直系であり、彼は「経済学の父」と呼ばれる。彼の登場により、古典派経済学が確立され、デイヴィッド・リカード、トマス・ロバート・マルサス、ジョン・スチュアート・ミルらがその基礎を築いた。
 - d. 19世紀には、資本主義経済の構造と運動法則を分析したカール・マルクスによるマルクス経済学が登場した。彼は労働価値説に基づき剰余価値論などを展開し、『資本論』を執筆した。
 - e. 同時期に、資本主義経済現象を数理的に分析する新古典派経済学が発展した。ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ、レオン・ワルラス、カール・メンガー、アルフレッド・マーシャルらがこの学派の発展に貢献した。
 - f. 20世紀には、世界恐慌を経て、市場に任せただけでは失業が発生するという問題意識から、政府による有効需要創出を主張するジョン・メイナード・ケインズのケインズ経済学が登場し、マクロ経済学の主流となった。ジョン・ヒックスやポール・サミュエルソンらがネオ・ケインジアン経済学を発展させた。
 - g. 1970年代のスタグフレーションを経て、ケインズ経済学の影響力が低下し、家計や企業の合理的予想を重視するロバート・ルーカスらによる新しい古典派経済学がマクロ経済学の主流となった。しかし、その後市場の失敗要因を重視するニュー・ケインジアンが台頭した。
 - h. ソ連の崩壊・冷戦終了後、計画経済の失敗が明らかになり、主流派経済学が経済研究の中心となった。しかし、主流派経済学に対する批判も続いている。
 - i. 経済学の特徴と研究方法:
 - j. 経済学は、不確実性の大きい人間が関わる社会現象を研究対象とする社会科学の中でも、数理化や実験が積極的に行われている分野であり、「社会科学の女王」と呼ばれることもある。
 - k. 理論経済学は、数学を用いたモデル分析を中心とし、ミクロ経済学とマクロ経済学に分かれる。近年ではマクロ経済学もミクロ的な基礎付けに基づいた分析が主流となっている。数学者や物理学者が経済学に貢献することも多い。
 - l. 実証経済学は、統計学を用いた分析（計量経済学）や、行動実験を用いた分析（実験経済学）を行う。統計学は古くから経済学に多用されてきた。近年の新しい流れ

として、心理学の知見を取り入れた行動実験が急成長しており、行動経済学や神経経済学といった分野を生み出している。

- m. 経済学は社会・政治・経済問題と不可分であり、政策提言として社会に関わる機会が多い。トーマス・カーライルによって「陰鬱な学問」と呼ばれた時期もあった。近年はゲーム理論を用いたマーケット・デザインなど、現実の制度設計に貢献する成果を上げている。

3. 経済学と関連分野:

- a. 経済学は、人文科学・社会科学、そして数学や物理学とも関連が深い。特に人類学、社会学、政治学、心理学とは隣接する学際領域である。
- b. 経営学とは対象範囲に違いがある。経済学が経済全体や広い範囲の人間行動を研究対象とするのに対し、経営学は企業というより小さい対象を研究する。経済学は方法論に重きを置くのに対し、経営学は研究対象に重きを置き、経済学を含む様々な分野の方法論を用いる。
- c. 経済学における論争:
- d. 経済学は社会・政治・経済と不可分であるため、歴史的に数多くの論争を生み出してきた。「重商主義・重農主義論争」、「穀物法論争」、「経済計算論争」、「ケンブリッジ資本論争」などが代表的な例である。これらの論争は、経済学理論の洗練に貢献してきたとされる。
- e. 現代の経済学の潮流と学派:
- f. 現代の経済学の研究の中心は主流派経済学（新古典派経済学とケインズ経済学を包含）となっているが、その内部でも様々な学派が存在する。
- g. 主流派経済学: 新古典派経済学、ケインズ経済学、マネタリスト、新しい古典派、ニュー・ケインジアンなど。
- h. 異端派経済学: 制度派経済学、進化経済学、複雑系経済学、オーストリア学派、ポスト・ケインズ派経済学など。
- i. 近年の主流派経済学における大きな動きとして、ゲーム理論と行動経済学の発展がある。ゲーム理論は経済主体間の相互作用の分析に、行動経済学は合理的でない人間の意思決定の分析にそれぞれ貢献している。
- j. 異端派経済学の中では、特に進化経済学が新しい主流派を形成しつつあるという評価もある。

4. 経済学の対象となる概念:

- a. 経済学の対象は有限な事物の分配・生産であるが、広義には貨幣を媒介としない価値をめぐる人間関係や社会の諸側面も含まれる。
- b. 研究対象は、理論的に説明・判断できる事実解明的分析と、価値判断や政策決定に関わる規範的分析に分けられる。
- c. 主要な用語・概念として、「財」、「サービス」、「資本」、「労働」、「賃金」、「需要と供給」、「一般均衡」、「有効需要」、「インフレーション」、「デフレーション」、「剰余価値」などが挙げられる。

主要人物:

提供されたキャストリストに記載されている主要人物は以下の通り。彼らは経済学の歴史において重要な貢献をした。

古代: プラトン、アリストテレス、トマス・アクィナス

重商主義: トーマス・マン、ウィリアム・ペティ、バーナード・デ・マンデヴィル、ダニエル・デフォー、デイヴィッド・ヒューム、ジェームズ・ステュアート

重農主義: フランソワ・ケネー

古典派経済学: アダム・スミス、デイヴィッド・リカード、トマス・ロバート・マルサス、ジョン・スチュアート・ミル

マルクス経済学: カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス、カール・カウツキー、ルドルフ・ヒルファールディング、ローザ・ルクセンブルク、ウラジーミル・レーニン

新古典派経済学: ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ、レオン・ワルラス、カール・メンガー、アルフレッド・マーシャル、ヨーゼフ・シュンペーター

20世紀以降（ケインズ経済学、新しい古典派、ニュー・ケインジアン、ゲーム理論、行動経済学等）: ライオネル・ロビンズ、ジョン・メイナード・ケインズ、ジョン・ヒックス、ポール・サミュエルソン、ロバート・ルークス、エドワード・プレスコット、グレゴリー・マンキュー、デビッド・ローマー、ジョン・フォン・ノイマン、ジョン・ナッシュ、デイヴィッド・ゲール、スティーヴン・スミール、チャリング・クープマンズ、マイロン・ショールズ、宇沢弘文、二階堂副包、ダニエル・カーネマン、エイモス・トベルスキー、バーノン・スミス、ゲーリー・ベッカー、ジョセフ・E・スティグリッツ、ロジャー・マイヤーソン、ハジュン・チャン

結論:

経済学は、資源の希少性、人間の行動、および社会制度という複雑な相互作用を研究対象とする、多様で進化し続ける学問分野である。その歴史は古く、様々な時代や社会の課題に応える形で発展してきた。古典派、マルクス経済学、新古典派、ケインズ経済学といった主要な理論体系が登場し、それぞれが異なる視点から経済現象を解明しようと試みた。現代では、ゲーム理論や行動経済学といった新しいアプローチが加わり、その研究対象と方法論はさらに広がりを見せている。経済学は単なる富の分析に留まらず、人間の幸福（ウェルビーイング）や社会全体のwell-beingを追求するための科学として、現実世界の政策決定や制度設計にも大きな影響を与えている。その定義や研究方法は今後も進化していくことが予想される。